GUEST INFORMATION

# JAPAN NOW

2009-2010

SPECIAL FEATURE #1

## 奈良——1300年の都

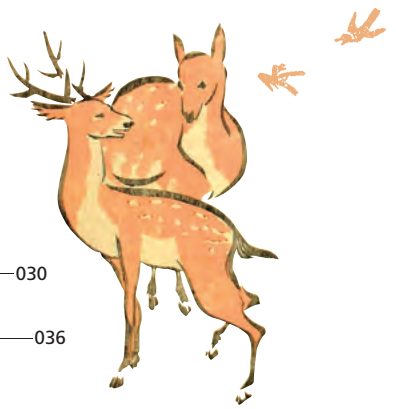
Nara——The 1300-Year-Old Capital

SPECIAL FEATURE #2

## メディアとシンボル

Symbols and Media

# contents



**Message for Japan**

好奇心こそがすべての原動力◉南部陽一郎——030
Curiosity is the Driving Power for Everything·Yoichiro Nambu

世界に向けて音楽を届けるために◉YOSHIKI——036
Composing Music for the World ·YOSHIKI

17の音で描き出す人の心◉やすみ りえ——039
Depicting Human Sentiments with Seventeen Syllables·Rie Yasumi

**Special Feature 1**

**奈良——1300年の都**
Nara—The 1300-Year-Old Capital

あおによしの国——046
Land of Vermilion and Verdure

四禽、図に叶う / 鎮護国家の夢 / 極東の国際都市 / 時の集積
According to the Plan and the Four Gods / The Dream of a Buddhist State / A Cosmopolitan City in the Far East / An Accumulation of Time

面影の奈良——日本の忘れもの◉松岡正剛——057
Traces of Nara·Seigow Matsuoka

春日若宮 おん祭——060
Kasuga Wakamiya On-matsuri

大宿所祭 / 宵宮祭·宵宮詣 / 暁祭 / お渡り式 / お旅所祭
Oshukusho-sai / Yoimiya-sai / Akatsuki-sai / Owatari-shiki / Otabisho-sai

日本誕生の地、奈良——平城遷都1300年祭——066
Nara, the Birthplace of Japan—Celebrating the 1300th Anniversary of Heijo-kyo

都市の源流◉朴 賛弼——070
Sources of the City·Park Chan-Pil

**Special Feature 2**

**メディアとシンボル**
Symbols and Media

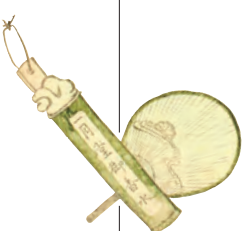
物語の誕生——084
The First Stories

世界の見取図 / 神霊を演じる / 遊びと装飾 / 主張する標
「私」の発見 / 空間と象徴
Sketches of the World / Playing Gods / Games and Ornaments / Marks with a Message / The Discovery of the Self / Spaces and Symbols

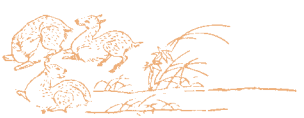
情報の将来——098
The Future of Information

花と柳◉ゴラーズ·ヴィルハー——074
The Flower and Willow World·Gorazd Vilhar

**Classic Japanese Story**——019
伴善男 / 護法童子 / 天狗 / 安珍·清姫
Tomo no Yoshio / Guardian Boys / Tengu / Anchin and Kiyohime



**Japan Now Recommendation**——106
本 / 音楽
BOOKS / MUSIC



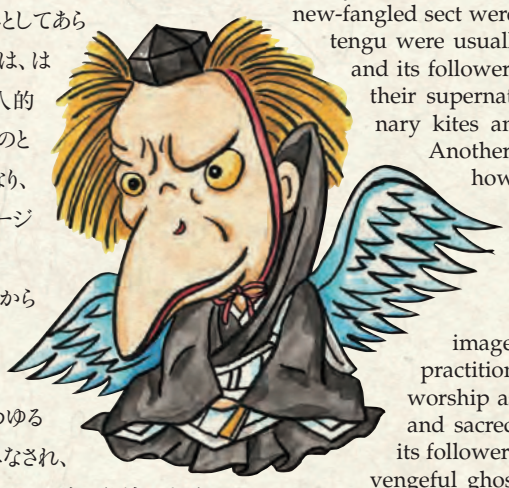
Cover Photograph
大西成明
Naruaki Onishi

# 天狗

Tengu

Characters from Picture Scrolls【3】

◉――天狗という呼び名は中国伝来ですが、中国ではあくまでもその文字があらわすように天に棲む狗（いぬ）であり、流星をあらわすとされてきました。また古代中国の空想的地誌書『山海経』によれば、山に棲む狸に似た白首の獣であるともいいます。日本でも当初は、天狗と書いて「あまつきつね」と読み、大乱の兆しとしてあらわれる流星を指す言葉でした。平安時代には、はるかな山中で不思議な琴の音を調べる超人的な存在であり、また姿のない木の霊のようなものとされましたが、やがては鳥のような物の怪となり、嘴と翼をもつ山の天狗（からす天狗）のイメージがつくられてゆきます。



◉――絵巻に登場する天狗の多くはこのからす天狗のタイプ。『天狗草紙』では、大きな寺の高慢な僧侶の姿や行いが、天狗にたとえられています。また、中世に登場したいわゆる鎌倉新仏教も、いかがわしい新興宗教とみなされ、修行者たちが天狗の姿で描かれたりもしました。おもに仏法および仏法修行者の害をなすものとして描かれた天狗は、空を飛ぶことはできるものの、通力を失うとトビとなってあわてふためくとされています。また、外国の天狗が日本の仏法を妨げるために渡来し、あえなく打ち破られて傷を治療して帰国するという話は、『是害坊絵詞』という絵巻にされています。

◉――天狗には害をなす仏法および仏法修行者のイメージだけでなく、修験道の霊場や寺院や修行者を護る護法善神として信仰の対象となったり、あるいは怨霊の化身とみなされ世に災いを起こすとして恐れられたりもしました。現在、各地の社寺に祀られている赤い顔で鼻が高く、羽団扇を持つ山伏姿のいわゆる鼻高天狗は、中世以降になってから出来上がった姿です。

◉――また天狗は、誰もいないはずの山中で大木を切り倒す音がする「天狗倒し」、山中で大勢の人の声や高笑いする声が聞こえる「天狗笑い」、大小の石がどこからともなく飛んでくる「天狗つぶて」など、山の中で不思議な現象を起こすともされていました。また、子どもを神隠しにする「天狗隠し」は、春先に多く、あとには子どもの履物がきちんと揃えられていることで、それとわかるといいます。天狗は多くの民話や昔話にも登場しますが、「天狗のめがね」や「天狗の隠れみの」のように、人間にだまされて大切な道具を奪われるという滑稽な役回りを演じるようになります。

Tengu are a kind of popular goblins in Japanese folklore. The name “tengu” comes from the Chinese and literally means “heavenly dog,” and in China that is just what they were – dogs that lived in the sky and resembled meteors. In the old fable collection *Shan Hai Jing*, they are also described as white-necked, raccoon-like beasts that live in the mountains. When tengu first appear in Japanese texts, the same Chinese characters are used, but they are read as “amasukitsune” (“heavenly fox”) and refer to a meteor that is a harbinger of a great rebellion. In the Heian period, tengu become supernormal creatures that investigate strange koto sounds in the mountains, or sometimes shapeless tree spirits, before the image gradually solidifies into a birdlike being with wings and a beak, the so-called *karasu-tengu* (“crow tengu”).

Most tengu that appear in scroll paintings are of this “karasu-tengu” type. In the *Tenguzoshi* scroll, tengu parody the shapes and activities of haughty priests. In the Kamakura period, a new school of Buddhism was formed that many considered dubious, and the adherents of that new-fangled sect were often depicted as tengu. In fact, tengu were usually seen as enemies of Buddhism and its followers. They could fly, but if they lost their supernatural powers, they became ordinary kites and fluttered about in confusion. Another scroll, *Zegaibo-ekotoba*, describes how an evil foreign tengu arrives to disturb Japanese Buddhism. He is easily defeated, but is allowed to heal his wounds before he is sent home again.

Quite apart from their image as enemies of Buddhism and its practitioners, tengu also became objects of worship as guardian deities of the temples and sacred sites of the Shugendo sect and its followers, or feared as the incarnations of vengeful ghosts that brought calamities upon the world. The current form, which is worshipped in temples all over the country —the red-faced, long-nosed *hanataka-tengu*, dressed in the garb of an itinerant monk with a fan made of feathers in his hand— did not appear until after the Middle Ages.

There are many expressions in Japanese that refer to tengu. The sound of a huge tree being chopped down deep in the supposedly unpeopled mountains is called “tengu felling,” loud laughter as from a huge crowd in the middle of the mountains is called “tengu laughter”, and a sudden shower of rocks and stones out of nowhere is called “tengu stones.” Tengu were deemed responsible for all kinds of strange phenomena in the mountains. Tengu were also blamed for spiriting away children. This was particularly frequent in spring, and if the child’s clogs were neatly lined up, it was a sure sign that it was the tengu’s work. Tengu are popular as comical characters in many folk tales and stories as well, such as *Tengu no Megane* (*The Tengu’s Glasses*) or *Tengu no Kakuremino* (*The Tengu’s Magical Cloak*) but there they are usually tricked by human beings who rob them of their precious possessions.

illustration: 川崎ゆきえ Yukie Kawasaki

# 好奇心こそがすべての原動力

*Curiosity is the Driving Power for Everything*

**南部陽一郎** ❖ Nambu Yoichiro

Profile: 1921年生まれ、幼少期を福井市にて過ごす。東大卒業後早創期の大阪市立大に赴任。52年に渡米、プリンストン高等研究所を経てシカゴ大学教授となる。クォークの「カラー」の前ぶれとなった三重クォーク模型など、つぎつぎに先駆的発想を放出、78年に文化勲章受章。「対称性の自発的破れ」のアイディアにより、2008年ノーベル物理学賞受賞。現在、シカゴ大学名誉教授。

Profile: Born in 1921. Spent his childhood in Fukui City. After graduating from Tokyo University, he joined the faculty of the newly established Osaka City University. Moved to the United States in 1952, first to the Institute for Advanced Study at Princeton, then as a professor at Chicago University. The inventor of a long range of pioneering concepts, such as the three-layer quark model which was a forerunner of the "color" of quarks, he was awarded with the Japanese Order of Cultural Merit in 1978, and then with the Nobel Prize in Physics in 2008 for his idea of "spontaneous symmetry breaking." Currently Professor Emeritus at Chicago University.

## ◉ ノーベル賞、日本は騒ぎすぎ

ノーベル賞受賞の知らせは、別に驚いただけで、とくに感想はありません。毎年そういう話がありましたから、「まさか」と思いまして。家内も「詐欺ではないか」とか「冗談では」と最初は本気にしませんでした。

ここ、シカゴ大学は2010年に120周年を迎えますが、私も入れて82人のノーベル賞学者を出しているので、ノーベル賞だからといって、特別騒ぎ立てることはありません。当人も周囲も皆、受賞前も受賞後も、変わりなく過ごしています。物理学賞に限っても28人いますので、珍しくないのです。

日本のマスコミの騒ぎ方は尋常ではありません。受賞の通知のあった朝、大学で記者会見をすることになり、私が校内を歩いていくと、何十人も取り囲んでぞろぞろついてくる。このような人たちをパパラッチというのでしょうか、日常生活がすっかり乱されてしまい、いささか嫌気がさしています。

ノーベル賞授賞式も、家内が体調を崩してしまったこともあり、欠席することにしました。大学の同僚は「それはいい考えだ」と賛成してくれました。

毎年言われて、今年（2008年）になったのは、スイス・ジュネーブにあるCERN（欧州原子核研究機構）の巨大粒子加速器が稼働しはじめ、私の「対称性の自発的破れ」のアイディアを用いて英国の科学者が存在を予言したヒッグス粒子が発見されそうだという事情と関係があるのかもしれません。

「対称性の自発的破れ」については、受賞の朝の記者会見でも質問が出て、部屋にあふれるばかりの聴衆を眺めながら、思いつくまま説明しました。

物理の法則では、ひとりひとり、勝手な方向を向いていていいはずなのに、私がここにいるので、皆こちらを向いている。これもひとつの対称性の破れです。しかも誰かがひとり、ふと横のほうを向くと、周りの人もつぎつぎに同じほうを向く。その動きが波となって伝わるようすが、南部・ゴールドストンの波で、質量の起源ともなる、というような話をしました。

## ◉戦時下でも、自ら学ぶのに不自由はなかった

福井の仏壇屋の息子だった父親は文学青年で、家を継がずに飛び出して、生涯小説家になることを夢みていました。しかも小説家になるには、人間に関するあらゆることを知っているべきだと考えて、科学に関する本もその一ジャンルとして、書斎に揃えていました。

私には『子供の科学』という雑誌を買い与えてくれて、興味をもって読んだ記憶があります。子供のころの私の英雄は何といってもエジソンで、いろいろなモノを発明するということに憧れました。

叔父がアマチュアの無線をやっていて、祖父母の家に遊びにいくと、それらしい材料がいろいろある。それを勝手に持ち帰って、ひとりで物置のようなところで、鉱石ラジオを組み立てました。材料にはマニュアルがついていて、数式が書いてある。それをどう解読するか自分なりに考える。小学生でわかるはずはないのですが、なるべくわかろうとすることが楽しかったのです。

福井という田舎で、しかも軍国主義の時代の教育というのは、今の人には想像もつかないでしょう。小学校2年まで男女共学で、3年から別れて、男子は男の先生に教わるようになる。修身の時間には武士のような先生がやってきて、「どうやって腹を切るか」を教えるのです。

中学校（今の高校）では、師範学校出の先生がほとんどいなくて、独学で検定試験を受けて先生になった人が大半でした。ひとりひとり個性的で教え方もちがうし、学科以外の話をいろいろしてくれて、おもしろかったのです。

歴史の先生は講談師のような人で、年代でも、東ローマ帝国の滅亡（1453）を「ローマ帝国は石とゴミになった」と朗々と語ってくれる。理科の先生が性教育をすると、植物の話からはじめて、動物にきて「精子が抜き手をきって泳ぐ」と説明する。そういうことは、今でも忘れられません。

小中学校にコンピュータのゆきわたった現在とは比べものにならない環境でしたが、基礎教育としては、非常に良かったと思います。このような伝統は今でも続いているようで、福井県は、小中学校の成績が日本でいちばんいいということです。

中学校では、岩波文庫のツルゲーネフの『散文詩』と『猟人日記』を読んで感銘を受けました。この2冊は、今でももっています。数学では岩波全書の藤原松三郎『行列及び行列式』（1937）を買って、独学でやっていました。好↙

↘奇心のおもむくまま、自分で欲して好きなことを勉強する習慣は、今日まで続いています。人の後を追いかけたり、同じことばかりやろうとするのは性にあいません。人間があまりに一様化すると創造性が失われる。進歩には多様性と矛盾が必要なのです。

## ◉最近の若い人は優秀、おおいに期待します

一高（今の東大教養学部）時代は、人生でいちばん楽しかった時代です。全寮制で、理系・文科系入り交じった8人ぐらいの同室者と、「人生とは何ぞや」とか「自己の発見が最高の目的」というようなことを夜通し語りあいました。

菅原正夫という数学の先生がいて、自分の崇拝するガロアやアーベルの話をしてくれて、「25歳までに何か仕事をせよ」と口癖のように話されたのもよく覚えています。また教室には陸軍士官学校の人もやってきて、彼らも「人生25」と覚悟を決めていたことも、一方ではありました。

専門を選ぶときには、数学も考えたのですが、抽象的なものに一生を費やすよりも、モノに近いことを勉強しようと、物理を選びました。

東大には当時物性論しかなくて、最初はそちらを勉強したのですが、湯川・朝永さんの名前が有名になっていて、詳しく知らないながらも興味を覚えました。学生有志5人が集まって、勉強したいと申し出たのですが、先生は「素粒子なんてのは、天才でないとできない」と拒否しました。それでも食い下がって、渋々認めてもらったのです。

理化学研究所に朝永・仁科研究室があり、理論が実験で検証されていく活気にみちたようすを、勝手に傍聴しに出かけていました。

大阪市立大時代は、焼け残った小学校が校舎という劣悪な環境でしたが、新制の大学としてスタートしたばかりで、学生もひとりぐらいしかいない。ほとんど家庭教師のように話しながら一緒に勉強しました。誰にも干渉されず、好きなことをやれたのが、楽しかった。

プリンストン高等研究所に行ったときには、アインシュタインにも会いましたが、量子力学を認めようとしない彼には、特別の幻想は抱いていませんでした。彼の『晩年に想う』の翻訳をした縁もあり、サインはもらいましたけど（笑）。アインシュタインもハイゼンベルクも、われわれ物理学者のひとりと思っています。

プリンストンで予定の2年がすぎ、もう少しこの環境で勉強したいと思っていたら、シカゴ大学が呼んでくれました。当時フェルミ研究所に大きなサイクロトロンが完成し、新しい実験ができるようになっていたのも魅力でした。待遇も申し分ありませんでしたし、国際会議などに出るにも、国籍がないと不便なので、米国籍も取得しました。

最近の日本の若い研究者を見ていると、とても優秀ですし、表現力も豊かで、自己を主張することになれています。英語も教授より上手ですし、論文も巧みです。モチベーションも高く、国際学会の経験もつんでいる。アメリカの学生と差はないでしょう。今後におおいに期待しています。

**人間があまりに一様化すると創造性が失われる。**
**進歩には多様性と矛盾が必要なのです。**

*When people get too homogenous they lose their creativity.*
*Diversity and contradictions are essential for progress.*

### ❖There is too much fuss about the Nobel Prize in Japan

When I first heard I had been awarded the Nobel Prize I was a bit surprised, but I was not particularly impressed. I had been rumored to win for years, so I just thought "It can't be true." My wife too first refused to take it seriously, thinking it was some kind of prank or a joke.

Chicago University will be celebrating its 120th anniversary in 2010 and has already produced 82 Nobel Prize winners, including me, so nobody makes any fuss here when you win a Nobel Prize. We have

had 28 winners just in physics, so it's not even very rare. For the winner, his family and his colleagues life goes on as usual, just like before winning the prize.

However, the noisiness of the Japanese media was astonishing. The morning I heard that I had won I had to give a press conference at the university, and as I was walking through the campus I was surrounded by dozens of journalists. Those paparazzi completely messed up my daily life in a way that was rather tiresome.

My wife is not well, so I decided not to attend the Nobel Prize award ceremony in Stockholm. My colleagues here at the university also agreed that it was a good idea to stay at home.

This year (2008), after years of talk, the Large Hadron Collider is finally starting up at CERN (the European Organization for Nuclear Research) in Geneva, Switzerland, and a group of British scientists will be using my idea of "spontaneous symmetry breaking" to try to find the Higgs particle that is predicted to exist. Perhaps that has something to do with why I won this year.

I was asked about spontaneous symmetry breaking as well during the press conference on the morning that I had been awarded the prize, and as I looked out over the audience that was overflowing the room, I tried to explain the idea in the first way that came into my head. According to the laws of physics, everybody is supposed to look in their own direction, but since I was there, everybody was looking at me. This is also a kind of spontaneous symmetry breaking. Moreover, if a single person happens to look sideways, those around him or her will also start looking in that direction, and this movement propagates like a wave, in the same way that Nambu-Goldstone waves give rise to mass.

## ❖Self-education during the war was no handicap

My father was the son of a Buddhist household altar salesman in Fukui Prefecture and a fan of literature. Rather than taking over the family business, he left home and spent his whole life dreaming of becoming a novelist. Not only that, he believed that to write novels, you had to know all sorts of things about humanity. Books about science was one such genre, and the shelves in his study were full of them. I remember that he used to buy a magazine called "Science for Children" for me, which I read with great interest. My big hero when I was a child was Edison, and I too longed to become a great inventor.

My uncle was an amateur radio enthusiast, and my grandparents' house was full of materials for that kind of thing. When I went there to play I would sometimes bring some pieces back home without permission, from which I assembled a crystal radio set in the storage room, all by myself. The materials came with manuals that were full of formulas, that I tried to decipher in my own way. This wasn't really possible for a elementary school student, but it was fun to try to understand as much as I could anyway.

It's probably beyond all conception for the people of today what the education was like during the age of militarism in a rural province like Fukui. For the first two years, boys and girls studied together, but from the third years we were separated and the boys had only male teachers. Ethics was taught by a samurai-like teacher who showed us "how to commit hara-kiri."

When I got to high school, there were almost no teachers left who had graduated from a regular college. Almost all of them had studied by themselves and taken an examination to become teachers. Their ways of teaching were highly individual, and they liked to talk about other things as well other than just the supposed subject, which was a lot of fun.

The history teacher was like a professional storyteller who would describe for us the fall of the Eastern Roman Empire (1453) in his sonorous voice: "Thus the Roman Empire turned into stone and rubble." The science teacher would start his sex education lessons from plants and then move on to animals, explaining how "the sperms swim with an overarm stroke." I'll never forget that.

Our school was of course totally different from today's computer-filled classrooms, but as a basic education, it was extremely good, I think. This tradition seems to continue to this day, and the elementary and junior high schools of Fukui apparently still get the best grades in the country.

In junior high school, I read and was very impressed by Turgenev's "Poems in Prose" and "Notes of a Hunter." I still have those two books. In mathematics, I bought Matsusaburo Fujiwara's "Matrices and Determinants" (1937) and studied it by myself. I have always loved to study the things that I like and that catch my curiosity. Following in the footsteps of others or doing the same thing as others do is not for me. When people get too homogenous they lose their creativity. Diversity and contradictions are essential for progress.

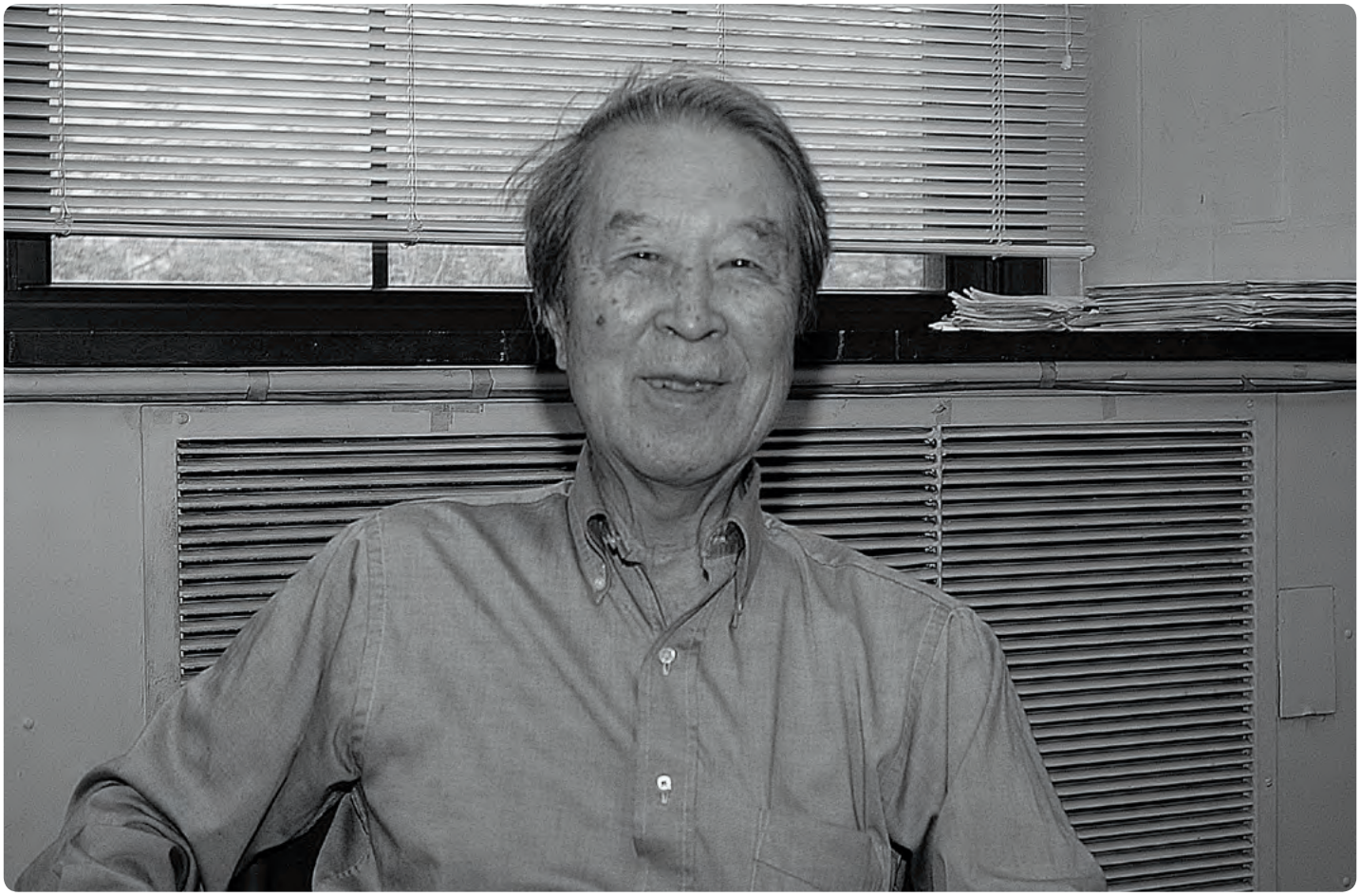
## ❖I have great hope for Japan's young scientists

The first years at Tokyo University were the best years of my life. It was a boarding school, and the eight of us in my room were a mix of science and humanities students. We used to stay up all night discussing things like the meaning of life or "self-discovery as the supreme objective."

I had a mathematics teacher named Masao Sugawara who worshipped Galois and Abel and always told us to "do something before you are 25." On the other hand, our classroom often had visitors from the Military Academy, and they too were prepared to die at 25.

When the time came to select my major, I first thought of doing mathematics, but then realized that I didn't want to spend my life studying something abstract, but rather something closer to "matter," so I chose physics instead.

At the time, physics at Tokyo University meant condensed matter physics, so that was what I studied to begin with, but then Yukawa and Tomonaga became famous and I wanted to know more, even though I had no clear idea of what they were doing. Five of us students went to our professor and said we wanted to study particle physics, but he refused, saying that "particle physics is only for geniuses." Nevertheless, he reluctantly let us have our way in the end.



Tomonaga and Nishina had their labs at RIKEN, and I used to sneak in to listen to the lively discussions as the latest theories were verified experimentally.

At Osaka City University, we were located in an old elementary school building that had escaped the bombings and fires. The environment was very poor, but as it was a brand new university, I only had about a single student. We studied together almost as if I had been his home tutor. I could do what I liked with nobody interfering, which I enjoyed very much.

When I went to the Institute of Advanced Study in Princeton, I met Einstein, but since he didn't approve of quantum mechanics, I had no particular illusions about him. As it happened, though, I had translated his "Out of My Later Years" so I took the chance to get my copy signed! But seriously, even Einstein and Heisenberg were just regular guys among us physicists.

My plan had been to stay at Princeton for two years, but I wanted to study a bit longer in that kind of environment, so my invitation to Chicago University came at just the right moment. At Fermi Labs, they had just completed their large cyclotron, and the ability to do new experiments was also very attractive. As a way of showing my gratitude to my hosts, I acquired American citizenship, which also made it much easier to attend international conferences.

When I look at the young researchers in Japan today, I find that they are both brilliant and self-assertive, and know how to express themselves. Their English is better than their teachers' and their papers are clever. They are highly motivated and have international conference experience too, just like their peers in the United States. I have great hopes for them.

## ノーベル賞の対象となったアイディアは30年前に熱く語られていた!

1978年夏、東京で開催された高エネルギー物理学国際会議のために来日した南部博士は、若き素粒子物理学者H·D·ポリツァー博士と対談。
自らの「対称性の自発的破れ」と、ポリツァー博士の「漸近的自由」というアイディアをめぐり、ユーモアを交えて語り合った。
ポリツァー博士は一足先(2004年)にノーベル物理学賞を受賞し、この対談は2人のノーベル賞科学者の熱き魂を記録した「歴史的対話」となった。

南部陽一郎+H·D·ポリツァー『素粒子の宴』
(1979/新装版2008 工作舎)

# 【特集1】奈良 ——1300年の都 ——大和から日本へ

# 鎮護国家の夢

## The Dream of a Buddhist State

かつての寺院は、信仰のためだけの施設ではなかった。とりわけ興福寺、東大寺、元興寺など南都七大寺と呼ばれる朝廷の保護を受けた寺院は、大学や病院、ときには軍事施設や大陸諸地域の大使館の役割も果たしていたと思われる。そこには最新の哲学、工学、薬学、医学などがあった。そして仏教教義や経典は国家建設にも多大な影響を与えている。
東大寺の大仏は、「金光明最勝王経」や唐から新たに伝来した「華厳経」の世界を表現したものだが、その発願者である聖武天皇の狙いは、総国分寺としての東大寺を中心とし、全国に国分寺・国分尼寺のネットワークをつくりあげ、仏教経典にもとづく理想国家を実現することにあったといわれている。この仏教国家の夢は、律令制度の崩壊とともに潰えていく。

In the old days, temples were not just places of worship. In particular the seven great temples of Nara (including Kofukuji, Todaiji and Gangoji) that stood under the protection of the Imperial Court also served as universities and hospitals – sometimes even as military facilities or foreign embassies. This was where you would find the latest advances in philosophy, engineering and medicine, and in return, Buddhist doctrine and the sutras had a great bearing on the nation-building project.
The large Buddha statue in the Todaiji temple was constructed under Emperor Shomu as a representation of the world according to the Golden Light Sutra and the freshly imported Flower Garland Sutra, but the emperor's real aim was even grander. He wanted to create a nation-wide network of monasteries and nunneries centered around Todaiji, and to implement a Buddhist ideal state based on the sutras. However, that dream soon crumbled along with the centralized government system.

東大寺金堂の盧遮那仏。一般に奈良の大仏と呼ばれる。745年に制作が開始され、752年に開眼供養会（魂入れの儀式）が行われたが、現存する像は中世・近世の補修を経ている。

The Great Buddha statue of Todaiji. Work on the statue began in 745 and it was consecrated in 752 by inserting the eyes, thereby investing it with a spirit. However, the statue that can be seen now has been repeatedly repaired over the centuries.

元興寺禅室。元興寺は、蘇我馬子が6世紀末、
飛鳥に建立した日本最古の本格的寺院、
法興寺（現在の飛鳥寺）が平城京に移転したもの。
禅室の一部に582年に伐採された樹木が使用されている。

Zen room of Gangoji.
The buildings of Gangoji were moved to
Heijo-kyo from the Hokoji (now Asukadera) temple in Asuka,
which was founded by Soga no Umako in the late 6th century
and is Japan's oldest real Buddhist temple.
Some of the logs used for the Zen room were felled in the year 582.

# 極東の国際都市

## A Cosmopolitan City in the Far East

すでに縄文時代の終わり、約2500年前頃から政変や戦乱を避け、中国大陸から多くの人びとが日本列島にやって来た。古墳時代には、朝鮮半島からもヤマト政権に仕える技術者集団が渡来している。列島は人口も多く、大陸から見ると交易圏としての魅力もあったようだ。もちろん遣隋使以前より、列島からも大陸に何度も使者が遣わされている。

平城京建設は、当時、海外からもたらされた最新の技術や情報の集大成でもあった。中国や朝鮮、ベトナムはもとより、すでに中国に定住をはじめていたインドや西アジアの人びとも平城京を訪れていたと考えられる。実際、正倉院には遣唐使に随行してペルシア人が来朝した記録が残されている。渡来人の代表格は、中国から膨大な医薬の知識をもたらした唐招提寺の鑑真だが、東大寺修二会（お水取り）をプロデュースした、実忠（じっちゅう）は、一説にペルシア人であるともいわれ、修二会に古いキリスト教や西アジアの儀式の影響を指摘する向きもある。

Already at the end of the Jomon period, some 2500 years ago, many people were arriving in Japan from continental China, fleeing from wars and upheavals. During the Tumulus period (3rd – 7th century), engineers and craftsmen came from the Korean peninsula to work for the Yamato government. The population of the archipelago was already large, and was apparently an attractive market for the continent. Naturally, Japanese envoys too frequently visited the continent, long before the 7th century diplomatic missions to the Sui dynasty.

The construction of Heijo-kyo was like a large compilation of the latest technologies from overseas. Visitors came from China, Korea and Vietnam, of course, but also from peoples from India and Central Asia that had begun to settle in China. Indeed, the Shosoin treasure house has a record of a visit by the Persian envoy to Tang China. One famous visitor was the Chinese monk Ganjin (688-763), who brought a wealth of medical knowledge, and one theory has it that the monk Jitchu, who created the famed Shunie water-drawing ceremony at Todaiji in 752, was actually from Persia, and points out similarities between this ceremony and early Christian and West Asian rituals.

明日香村の猿石。平城京以前より奈良には海外から多数のひとびとが渡来していた。猿石と呼ばれる石像は、彼ら渡来人をかたどったものだとされている。またいわゆる飛鳥の石造物には、中国や朝鮮の民間信仰の影響をうかがえるものが少なくない。

Monkey stones in Asuka-mura. Plenty of people visited the Nara region from overseas even before Heijo-kyo was built. These so-called "monkey stones" are thought to have been modeled on such foreign visitors, and many of the stoneworks from Asuka show influences from Chinese and Korean folk beliefs.

おん祭、お旅所祭の舞楽より「貴徳（きとく）」。
前漢の宣帝の時代に北アジアの遊牧国家、匈奴の日逐王が漢に降り、
帰徳侯に封ぜられたという故事に由来するとされる舞。
舞楽は、古代朝鮮、中国大陸、ベトナムなど東南アジア、
さらには西アジアから伝えられた芸能をもとに成立した。

"Kitoku," a *bugaku* dance performed at the On-matsuri festival.
It is said to show a king dancing after victory in battle
in the time of Emperor Xuan (91 – 49 BC).
Bugaku was a form of music and dance based on performing arts from
ancient Korea, China and South East Asia, and in some cases Western Asia as well.

**◉暁祭**［12月17日］

「遷幸の儀」は、すべて浄闇の中で執り行われる。神霊は榊の枝で幾重にもかこまれお旅所の行宮まで遷される。神職が口々に間断なく「ヲー、ヲー」という警蹕（けいひつ）の声を発し、また道楽（みちがく）の慶雲楽（きょううんらく）を奏でる楽人たちがお供をする。遷幸の儀に続く暁祭では、行宮の前に神を迎えた事を示す植松（うえまつ）が立てられる。神前には海川山野の品々が献じられ、紅白の紙を貼った四角い台に檜葉を差込み餅と蜜柑を交互に差し立てた「素合御供（すごのごく）」が奉られる。最後に、宮司の祝詞に続き、社伝神楽が奏せられる。

**◉お渡り式**［12月17日］

おん祭の「お渡り式」は、お旅所の若宮神のもとに芸能集団や祭礼に加わる人々が社参する行列のこと。意匠を凝らした華やかな風流の行列である。奈良市街地を経て、一の鳥居を入りすぐ南側の「影向の松」の前で「松の下式」を行った行列は、お旅所へと練り込む。平安時代から江戸時代にいたる風俗をいまに伝える伝統行列が中心となっている。おん祭の創始の際の「楽人・日使（ひのつかい）・巫女・伝供御供・一物（ひとつもの）・細男（せいのお）・猿楽・競馬・流鏑馬・田楽」という骨格を整えつつ、時代の流れに応じて新しい姿を取り込んできた。

**◉Akatsuki-sai**［December 17］

The entire *Senko-no-gi* transfer ceremony is performed in complete darkness. A group of Shinto priests surround the divine spirit with layers of *sakaki* branches and guide it to the *otabisho*, continuously keeping up an unearthly chant to herald the passing of the god. They are followed by a group of musicians playing ancient *kyounraku* music.

The transfer ceremony is followed by the Akatsuki-sai, or "dawn festival," in which a pine is raised in front of the *otabisho* to signal the arrival of the god. Fruits of the land and the sea are offered, and on a table ornamented with red and white paper strips, mandarin oranges are arranged alternately with rice cakes garnished with cypress leaves. After a final prayer by the head priest, a traditional Shinto dance is performed.

**◉Owatari-shiki**［December 17］

The Owatari-shiki is a procession where all the performers and participants in the various rituals of the On-matsuri take part. It is a huge display of elaborate elegance and refinement. After passing through the streets of Nara, the parade enters through the Ichinotorii gate. Just to the south stands the ancient Yogo-no-matsu pine tree, where the Matsunoshita-shiki ceremony is held, before the procession continues on to the *otabisho*. Most sections of the procession keep up customs and traditions from the Heian through the Edo periods that have been handed down from generation to generation. When the On-matsuri was founded, the recipe called for "musicians, envoys, *miko* shrine maidens, carriers of offerings, sacred boys on horseback, *seino* dancers, *sarugaku* actors, speed riders, horseback archers, and *dengaku* performers." This framework has basically been kept, while adding new elements according to the times.

## Elegance 風流【ふりゅう】

◉神前に献じられる海川山野の品々。

❖Offerings from land and sea.

◉社伝神楽。

❖Traditional Shinto dance.

◉お渡り式の出発を待つ。

❖Waiting for the departure of the procession.

◉巫女（拝殿八乙女）。白の被衣（かずき）をいただき、風流傘を差しかけられながら騎馬ですすむ。

❖*Miko* shrine maiden in a white veil on a white horse, shielded by an decorated parasol.

◉頭屋児（とうやのちご）。興福寺の学侶より選ぶ２人の稚児で、松の下式を検知する。

❖Two festival pages selected from the Kofukuji temple school observe the proceedings.

◉松の下式での猿楽。猿楽は能楽の古名。

❖*Sarugaku* performance during the Matsunoshita-shiki. *Sarugaku* is an old form of Noh.

◉お渡り行列のひとつの中心だった馬長児（ばちょうのちご）。山鳥の尾を頂に立てたひで笠をかぶり、背中に牡丹の造り花を負う。

❖The riding page is one of the highlights of the parade. His hat is garnished with the feather of a mountain bird, and on his back he wears an artificial peony blossom.

◉将馬（いさせうま）。大和の大名家中より奉った引き馬の名残り。馬上には人を乗せない。

❖This horse is a symbol of the draft horses the feudal lords used to offer in ancient times. It carries no rider.

◉野太刀。5.5メートルほどもある野太刀を先頭に中太刀・小太刀・薙刀・数槍と続く。

❖These 5.5 m long swords are followed by shorter swords, spears and halberds.

◉行列の最後を飾る大名行列は、江戸時代からお渡りに加わった。そのかけ声が、まだ参道にこだましているなかお旅所祭がはじまる。

❖The Daimyo Parade was added to end of the procession in the Edo period. Even as the cheers of this parade are still reverberating, the Otabisho-sai is already commencing.

日本誕生の地、奈良

# 平城遷都1300年祭

*Nara, the Birthplace of Japan*

## *Celebrating the 1300th Anniversary of Heijo-kyo*

【2010年1月1日～12月31日 | January 1 – December 31, 2010】

2010（平成22）年は、日本初の本格的な首都である「平城京」が誕生してから1300年目にあたります。これを記念し、平城京誕生の地である奈良県を中心に、平城遷都1300年祭が実施されます。

平城遷都1300年祭は、日本の歴史・文化が連綿と続いたことを“祝い、感謝する”とともに、“日本のはじまり奈良”を素材とし、過去・現在・未来の日本について、あらためて“考える”機会でもあります。

【全体概要】

**会期**：2010（平成22）年1月1日～12月31日
　　平城宮跡では、4月24日～11月14日

**会場**：平城宮跡（主会場）
　　奈良県内、関西等の各地

2010 marks the 1300th anniversary since the founding of Japan's first real capital city, Heijo-kyo, in present-day Nara. This will be the occasion of various commemorative events and festivals throughout the year around Nara Prefecture.

The "Festival for the 1300th Anniversary of Heijo-kyo" will celebrate both the long continuity of Japan's history and culture and Nara as the "birthplace of Japan," but will also provide an opportunity to reflect on Japan – past, present and future.

【Outline】

**Period**: January 1 – December 31, 2010
　　At the Heijo Palace Site: April 24 – November 14

**Venues**: Heijo Palace Site (main venue)
　　Other locations in Nara City and the Kansai region

# 平城宮跡の四季を彩る
*The Four Seasons at the Heijo Palace Site*

◉**平城遷都1300年記念祝典**［2010年10月］
平城宮跡に復原される大極殿前庭を会場に、皇室、国内外のVIPなどを迎え、平城京と日本の1300年の歴史を祝い、それを支えた先人に感謝するとともに、将来に向けた創造の理念を発信します。

◉**花と緑のフェア**［春季：2010年4月24日～5月9日］
平城宮跡の各所が花や緑で飾られ、往時の姿に思いを馳せることのできる魅力的な空間が演出されます。
❖まほろばステージ「春の宴」（仮称）
❖平城（なら）遷都祭2010

◉**光と灯りのフェア**［夏季：2010年8月20日～8月27日］
朝堂院エリアを中心に行われる「光と灯り」の演出や夜のパレード、光の演出と連動した雅楽や古楽器などのコンサートが実施されます。

◉**平城京フェア**［秋季：2010年10月9日～11月14日］
中国、韓国をはじめ、シルクロード沿線諸国等の民俗芸能や音楽、日本の伝統芸能などを中心に、多彩な催事が行われます。また、奈良時代の古代行事・儀式が再現され、往時の平城京の様子が体感できます。
❖大極殿音絵巻
❖古代行事の再現

◉**通季イベント**［4月24日～11月14日］
❖展示施設「平城京歴史館」（仮称）
❖遣唐使船復原展示

◉**Ceremony for the 1300th Anniversary of Heijo-kyo**［October, 2010］
At the forecourt of the reconstructed Former Imperial Audience Hall (Daigokuden) at the Heijo Palace Site, members of the imperial household and Japanese and foreign dignitaries will celebrate the 1300 years since the founding of Heijo-kyo and 1300 years of Japanese history, showing appreciation to the previous generations who kept the traditions alive, and communicating Japan's creative spirit towards the future.

◉**Flower and Plant Fair**［Spring: April, 24 – May, 9, 2010］
The grounds of the Heijo Palace Site will be decorated all over with plants and flowers, giving a fascinating glimpse of what the palace may once have looked like in all its splendor.
❖Spring Banquet at the Mahoroba Stage
❖Festival for the Foundation of Heijo-kyo (Nara), 2010

◉**Light and Candle Fair**［Summer: August 20 – 27, 2010］
The Chodoin area will be spectacularly illuminated, and there will be a night parade and concerts by candlelight featuring gagaku and other ancient instruments.

◉**Heijo-kyo Fair**［Autumn: October 9 – November 14, 2010］
This will be a colorful festival featuring traditional arts of Japan together with folk music and dance from China, Korea and other countries along the Silk Road. Ancient rites and ceremonies from the Nara period will be revived, letting you experience the magic of the old Heijo-kyo.
❖Music and scroll paintings in the Former Imperial Audience Hall (Daigokuden)
❖Revival of ancient ceremonies

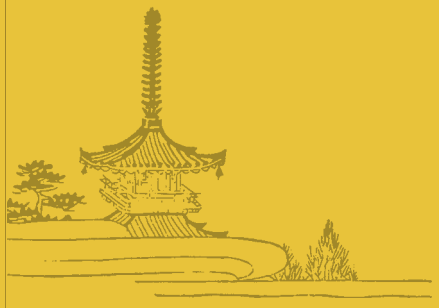
◉**Throughout the year**［April 24 – November 14, 2010］
❖"Heijo-kyo History Museum" (permanent exhibition)
❖Exhibition of reconstructed ships for envoys to Tang dynasty China.

# 都市の源流——平城京

【法政大学建築学科】朴賛弼

## Sources of the City – Heijo-kyo

**Park Chan-Pil** / Department of Architecture, Hosei University



### 古代都市平城京

●——平城京は今から約1300年前、日本の首都として計画されました。元明天皇（位707～715）の時、和銅3年（710）、それ以前の都であった藤原京から遷都が行われ、延歴3年（784）、都が長岡京に遷されるまでが平城京の全盛期です。山城国の長岡京へ遷都した後は、南都とも呼ばれるようになります。いわゆる奈良時代は、この長岡京から現在の京都、すなわち平安京への遷都がおこなわれるまでの期間を指します。80年余り続いたこの時代は、歴史の流れのなかではそれほど長い期間ではありませんが、国家としての日本の礎が築かれた時代と言ってもいいでしょう。

●——平城京の立地として、藤原京の北、三方が山に囲まれた奈良盆地が選ばれました。ここは風水思想からも理想的な場所でもあります。

●——「なら」という呼称の由来は色々な説がありますが、中でも「平坦な都」をあらわすとする説がもっとも有力です。現在でも、起伏のあるものを平らにすることを「ならす」といいます。平城京以前、飛鳥時代の藤原京の南の山が高く、北が低いという地形から、盆地の真ん中の平地へ移ったという意味が込められて「なら」と呼ばれるようになったとされています。平坦な吉祥の地で秩序整然に計画された平城京は、後の平安京（京都）の都へと発展する契機になった都市づくりでした。

### 秩序整然な都市計画

●——当時の日本や韓国の都城は、中国の都城をモデルとして造られています。その理想のかたちは、漢代以降、儒教の古典書として重視された『周礼』の考工記に記述されています。同書には、都城の規模は「方九里」、すなわち一辺を9里とし、城内には「国中九経九緯」、すなわち南北東西に9条ずつの道路を通し、グリッドによる秩序整然な都市計画が示されています。

### The Ancient City of Heijo-kyo

Heijo-kyo (present-day Nara) was planned and built around 1300 years ago as the capital of Japan. In the year 710, the Empress Gemmei decided to move the capital here from its old location in Fujiwara-kyo, and the brief period until 784, when the capital was temporarily relocated to Nagaoka-kyo, was Heijo-kyo's heyday. The so-called Nara period includes a few more years, until the capital was permanently moved to Heian-kyo (Kyoto) in 794. Historically speaking, eighty-odd years is not a very long time, but it is no overstatement to say that the Nara period is when the cornerstone was laid for Japan as a nation.

For the location of the new city of Heijo-kyo, the Nara Basin was selected, north of Fujiwara-kyo, and surrounded by mountains on three sides. This was an ideal site from a feng shui point of view as well.

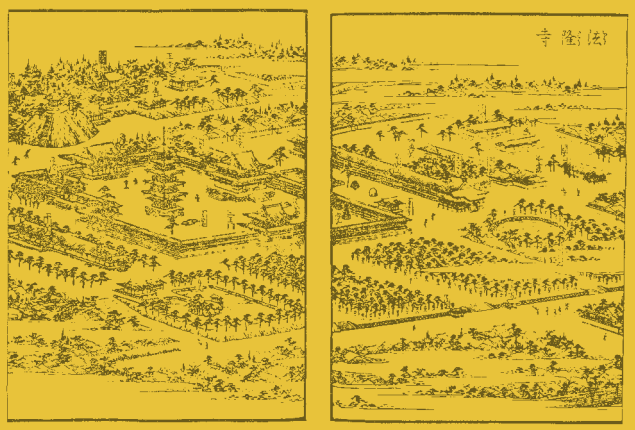
There are various theories about the origin of the name "Nara," but the most plausible is that it meant "Flat City." The previous capital, Fujiwara-kyo of the Asuka period, was located in hilly terrain between high mountains to the south and lower mountains to the north, so moving to a plain in the middle of a basin indeed represented a "leveling out." Heijo-kyo was built on flat, auspicious ground according to a highly ordered layout, a pattern that was even further developed when Heian-kyo (Kyoto) was founded some decades later.

### Systematic City Planning

In those days, the ordered city layouts of Japan and Korea were modeled upon the castle towns of China, an ideal that went back to the ancient book "Rites of Zhou" which had been revered as a Confucian classic already since the Han Dynasty about 2200 years ago. This text describes the plan for a perfect castle town as a grid with a size of 9 x 9 *ri* (one *ri* at that time was approximately 400 meters), and nine roads each running north to south, and east to west.

When investigating the origins of Japanese castle towns, the shadow of the Tang Dynasty capital Chang'an looms large, but while that city was built on ground sloping from south to north, Japanese cities from Heijo-kyo onwards were built the other way around, on terrain sloping to the south. In Korea, the Royal Palace of Silla was built in the same sort of north-sloping landscape as Fujiwara-kyo, but its grid layout strongly resembled that of Heijo-kyo. It is a characteristic of the Japanese castle cities that they were not surrounded by walls. On the Korean peninsula, the Baekje and Goguryeo capitals were walled cities just like Chang'an, but the Silla capital was not walled, presenting a suggestive and very interesting parallel to the Japanese cities.

平城京
Heijo-kyo



法隆寺
Horyuji

●――日本の都城の源流を探るうえで、唐の長安城は大きな意味を持っています。ただし、長安城が築かれた地形は南から北へ傾斜する土地であるのに対し、平城京以降は北から南へ傾斜する逆の地形条件となります。韓国の新羅王宮の場合、南北傾斜の地形条件は藤原京と同じですが、グリッドなど都市の構成は平城京に似ています。また、日本の都城は羅城がないことが大きな特徴ですが、朝鮮半島の百済王京や高句麗王京の都城は長安と同じように羅城がありました。新羅王京だけ羅城が存在しなかったことは、日本の都城との類似を示唆し、興味深いところです。

●――平城京は長安京、藤原京をモデルとし、グリッドを形成する道路によって整然と区画された都市でした。南側に位置する藤原京の、ひとつの都市軸である大和古道の下ツ道をそのまま北に延長して朱雀大路とし、同じく中ツ道が左京東辺に対応しています。都の中央には朱雀大路が南北にはしり、この軸を中心に都市は左京、右京に分けられ、さらに左京の東には外京がありました。条坊の方眼は1坊1,500大尺（約532m）原則とし、その規模は東西4.3km、外京を含むと5.5km、南北4.8kmとなります。前都の藤原京の約3倍の大きさでした。平城京の北部中央に位置している平城宮は、天皇の日常生活の場である内裏と、天皇が政務を行なう朝堂、新年・即位などの大礼を行なった大極殿、その他の各官庁などがあり、国家の政治の中心をなしていました。京内で班給された土地は、藤原京と同様に官位により面積がことなり、豪邸から庶民住宅まで、さまざまな規模の宅地が存在していました。

●――そのほか、元興寺、大安寺、薬師寺など飛鳥地方にあった寺院の多くがこの地に移され、都を華やかに彩りました。都城内の寺院や邸宅は長岡京へ移るまで、段階的に造営されたと考えられています。

**風水思想からみた平城京**

●――東アジアにおける風水思想は、自然との調和の思想を取り入れた古代の環境デザインでもありました。風水思想によって、山に囲まれた地形が理想的な場所とされ、その場所に都市をつくり、さまざまな文化が育まれてきました。山に囲まれた平坦な場所がいわゆる明堂であり、“気”が最も集まる中心的な空間でした。この明堂は、後方に山を背負い前面に水を持つ、背山臨水、背山面水、あるいは背山前水と呼ばれる立地で、吉祥の地をあらわします。また、

# 都市の理想のかたちは、漢代以降、儒教の古典書として重視された『周礼』の考工記に記述されている。

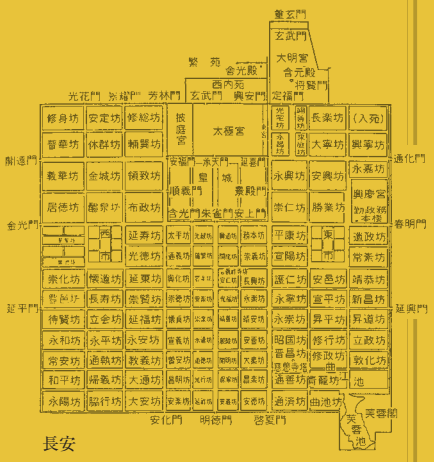
Heijo-kyo was a city modeled upon both Chang'an and Fujiwara-kyo, and had a highly ordered grid of roads and divisions. One of the old Yamato roads that formed the axis of Fujiwara-kyo was extended straight to the north and became Suzaku Boulevard, the main street of the new capital. With Suzaku Boulevard running north-south as its central axis, Heijo-kyo was divided into the Right capital and the Left capital. To the east of the Left capital, there was an Outer capital as well. The basic distance between the grid lines was 1,500 large shaku (approximately 532 meters), and the size of the whole layout was 4.3 km from east to west (5.5 km including the Outer capital) and 4.8 km north to south. This was around three times as large as the old capital of Fujiwara-kyo.

The Heijo palace in the north of central Heijo-kyo was the political center of the country and included a residence, where the emperor went about his daily life, the Daigokuden hall where governmental affairs were conducted and enthronements, new year's rites and other imperial ceremonies were held, as well as various administrative offices. Just like had been the case in Fujiwara-kyo, the land was divided according to rank and order, and the city had all kinds of buildings from stately mansions for the aristocracy to humbler abodes for commoners.

In addition, Gangoji, Daianji, Yakushiji and several other Buddhist temples moved along from the Asuka region, giving color to the new capital. The construction of new temples and residences in the city is believed to have continued gradually all the way until the capital was relocated to Nagaoka-kyo in 784.

**Heijo-kyo and Geomancy**

In East Asia, the ancient philosophy of feng shui might be considered a kind of environmental design for living in harmony with nature. According to feng shui, a level piece of land surrounded by mountains is considered an ideal space, since it allows the flows of *qi* to concentrate. A place with mountains in the back and water in front was considered particularly auspicious, and consequently many cities were built in such places, giving rise to various cultures. Rivers flowing inside or outside this space were also very important from a feng shui point of view.



長安
Chang'an

明堂の内側に流れる川は内水、外側を流れる川は外水と呼ばれ、もっとも重要な風水要素とされてきました。

●――理想的な地形は、四方が山に囲まれるもので、それぞれの山には神が存在します。すなわち、北の山には玄武、南には朱雀、東には青龍、西には白虎という動物になぞらえられた四神がそれぞれ鎮座し、それぞれの役割を担って、盆地となる明堂の空間の守護に当たっています。この構造を四神思想といいます。このような自然条件は、あらためて考えてみれば、都市の中で人が暮らすためには最適なエコロジカルな空間でもあります。

●――平城京はもちろん、風水思想からみて背山臨水や四神相応に相応しい地です。北に高山（玄武）を背負い、西に生駒山（右白虎）、東に若草山（三笠山、右青龍）、南には耳成山（朱雀）に囲まれ、“気”の集まる吉祥の地、即ち明堂にあたります。東の佐保川、西の秋篠川が風水でいうところの内水であり、両者は南に下ったところで合流して外水となります。平城京の配置は四方の山を結ぶ、南北軸、東西軸の上に配置されています。風水思想では、北側の高山は主山、南側の耳成山は案山と呼ばれ、その南北ふたつの山を結ぶ軸は良い“気”が流れる道です。また、若草山から生駒山へ結ぶ東西軸は南北軸の“気”を集め、コントロールする重要なラインです。平城京の南北軸の中心は、やはり朱雀大路です。この道路は“気”がもっともよく流れる通路であり、北側に平城宮が位置していることも、風水思想的にも非常に理想的な配置です。また、宮殿の正門として、南の神である朱雀の名をそのまま付した朱雀門を建てたことは、当時、実際に風水思想を強く意識していたことのあらわれだと思われます。以上のように平城京は、四方の山々や河川によって守護された、風水に祝福された都市だといえるでしょう。

**世界最古の木造建築物と世界最大の木造建築**

●――奈良には木造建築物として世界でもっとも古い建物と、もっとも大きい仏堂建造物があります。世界文化遺産にもなった飛鳥・法隆寺の五重塔と東大寺の大仏殿です。

東アジアにおける風水思想は、自然との調和の思想を取り入れた古代の環境デザインでもあった。

東大寺
Todaiji

The ideal space was surrounded by mountains in all four directions, and in each mountain there was a god: Genbu, the Black Tortoise of the north; Suzaku, the Red Bird of the south; Seiryu, the Blue Dragon of the east; and Byakko, the White Tiger of the west. They each had their role to play as guardian deities of the auspicious place in the basin below. This constellation is known as the Four Symbols or Four Deities. When you think about it, you realize that these natural conditions created ecologically optimal circumstances for the people living in the city as well.

From a feng shui perspective, Heijo-kyo was of course such an ideal topography for the four gods, an auspicious place where the flow of *qi* could concentrate, with a mountain in the back and water nearby. If you stood with Mt. Takayama behind your back to the north, you had Mt. Ikoma to your right (west), Mt. Wakakusa to your left (east), and Mt. Miminari in front, to the south. Inside the space, the Sahogawa river flowed to the east, and the Akishinogawa river to the west, merging downstream further south, on the outside. Heijo-kyo was laid out along the axes between the mountains north-south and east-west. Geomantically speaking, Mt. Takayama to the north was the main mountain, and the north-south axis provided a path for the flow of good *qi*. The axis between the eastern and western mountains collected this *qi* flow and served as an important regulator. The center of the north-south axis was the Suzaku Boulevard. This is where *qi* flowed most freely, and the location of the Heijo palace at the north end was feng shui-wise absolutely ideal. The fact that the main gate to the palace, Suzakumon, was named after the southern god Suzaku is a clear indication of the extreme importance attached to feng shui at the time. According to feng shui, Heijo-kyo was a truly blessed city, protected by mountains in the four directions and surrounded by rivers.

**The World's Oldest and the World's Largest Wooden Buildings**

Nara has both the world's oldest wooden building and the world's largest wooden building: the five-storied pagoda at Horyuji and the Great Buddha Hall at Todaiji, both of which are listed as World Heritage sites.

Horyuji was originally commissioned by Empress Suiko and Prince Shotoku in the early 7th century. In the temple compound, there are 18 structures designated as national treasures, including the five-storied pagoda, which is the world's oldest wooden building. The pagoda was built to contain the Buddha's ashes, but is also well-known as Japan's first earthquake-resistant construction.

# 飛鳥の法隆寺五重塔は日本最初の耐震建築としても知られている。

●――法隆寺は、7世紀初頃に推古天皇と聖徳太子により創建されました。寺内は世界最古の木造建築物の五重塔（西院伽藍）をはじめ、国宝に指定されている建造物が18棟もあります。五重塔は仏舎利を納めるための建造物ですが、日本最初の耐震建築としても知られています。その形は上にいくにしたがって塔身が細い、安定感のあるプロポーションを持っています。また、「キャップ構造」や「天秤効果」という耐震性を考慮した仕組みで、過去の大地震をのりこえてきました。「キャップ構造」とは、あたかも帽子を被っているような形であることによる呼称です。五重塔の各階の屋根は、それぞれの下の屋根に帽子のように乗せられているだけです。また「天秤効果」とは、軒と垂木にかかる上層全体の重量が、まるで天秤ではかるときのように平行に釣り合っている構造を示します。この「キャップ構造」と「天秤効果」によって、地震時には各層が独立して揺れ動くことで、力を逃がすことが可能となり、五重塔は倒壊から守られてきたわけです。

●――一方東大寺は、奈良の象徴ともいえる大仏を祀る金堂をはじめ、二月堂、多数の宝物を保存してきた正倉院などの国宝を含む、数多くの建造物によって構成されています。

●――国家鎮護の寺、東大寺の大仏殿（金堂）は、757年聖武天皇によって建てられた日本を代表する仏教建築です。1180年に焼失し1195年に再建されますが、ふたたび1567年に焼失してしまいました。現在の大仏殿は、公慶によって1709年に建てられたものです。創建当時は、東西幅86mという巨大な建築物でしたが、3代目の現在の大仏殿も、東西約57m、南北約50m、高さ約48mとスケールダウンしたとはいえ、世界最大の木造寺建築物であり続けています。

●――大仏殿の柱は直径1.2m、高さ30mですが、その寸法の柱を切り出せる巨大な木材の入手は困難でした。そこで考えられたのがいわゆる集成材という方法でした。つまり、1m程度の芯柱の周囲に20cmの扇形の板を張ることで、柱の直径を1.2mにしたわけです。さらに、帯状の銅で周囲を固定し、釘を打ちつけて補強することで、より太く丈夫な柱になります。大仏殿の再建時には、元の規模を復元するためにするには92本の巨木が必要でしたが、当時は60本集めるのが精いっぱいであり、そのため東西幅が約86mから57mへ縮小されたのです。しかし、集成材などの工夫により、南北の長さや高さはほぼ同じ規模で建てられ、1709年に見事に蘇ることになりました .

●――現在、平城京の都市構造はその一部しか残されていません。しかし、古代の人々が理想とした都市や建造物の面影は、奈良の町のいたるところに、いまもとどめられているのです。

The structure gets increasingly slender with increasing height and has very stable proportions. Furthermore, thanks to two clever ideas known as “cap construction” and the “balancing effect,” it has been able to withstand a number of large earthquakes in the past. The name “cap construction” refers to the fact that the structure looks as if it is wearing a series of hats. The roof of each storey in the pagoda is placed on top of the roof below, like a hat. The “balancing effect” is that the building is constructed so that the weight of the upper stories is evenly balanced on the eaves and rafters, almost like a set of scales. Thanks to the cap construction and the balancing effect, during an earthquake, each storey trembles independently of the others, letting the energy escape, and preventing the tower from collapsing.

Todaiji, the guardian temple of Japan, also contains several structures that are designated national treasures, including the hall housing the great Buddha statue that is the symbol of Nara, as well as the Nigatsudo hall and the Shosoin Treasure House.

The Great Buddha Hall (the main sanctuary) at Todaiji was originally built by Emperor Shomu in the year 757 and is one of Japan’s foremost examples of Buddhist architecture. The original structure burnt to the ground in 1180 and was then rebuilt in 1195, before burning again in 1567. The current Great Buddha Hall is from 1709. While the original building had been an enormous structure with a width of 86 meters from east to west, the third and current version was slightly scaled down to 57 m east-west by 50 m north-south and a height of about 48 m, but it nevertheless remains the world’s largest wooden building.

The pillars have a diameter of 1.2 m and a height of 30 m, but obtaining timber with such immense measurements proved a very difficult task. Instead, somebody had the great idea to use laminated wood. By attaching 20 cm of fan-shaped boards onto a huge log with a diameter of 1 m, it was possible to achieve the desired pillar diameter of 1.2 m. Tying the pillars with copper bands and reinforcing them with nails made them even more robust. The original plan had called for 92 giant logs, but when rebuilding the hall, only 60 could be found. This meant that the east-west width had to be reduced from 86 to 57 m. However, thanks to the use of lamination, the north-south width and the height remained virtually unchanged, and in 1709, the Great Hall was magnificently restored.

Today, only a small part of Heijo-kyo’s urban structure remains, but you can still find traces of what the ancients considered an ideal city and its buildings all over Nara.

興福寺
Kofukuji

# 花と柳

## *The Flower and Willow World*

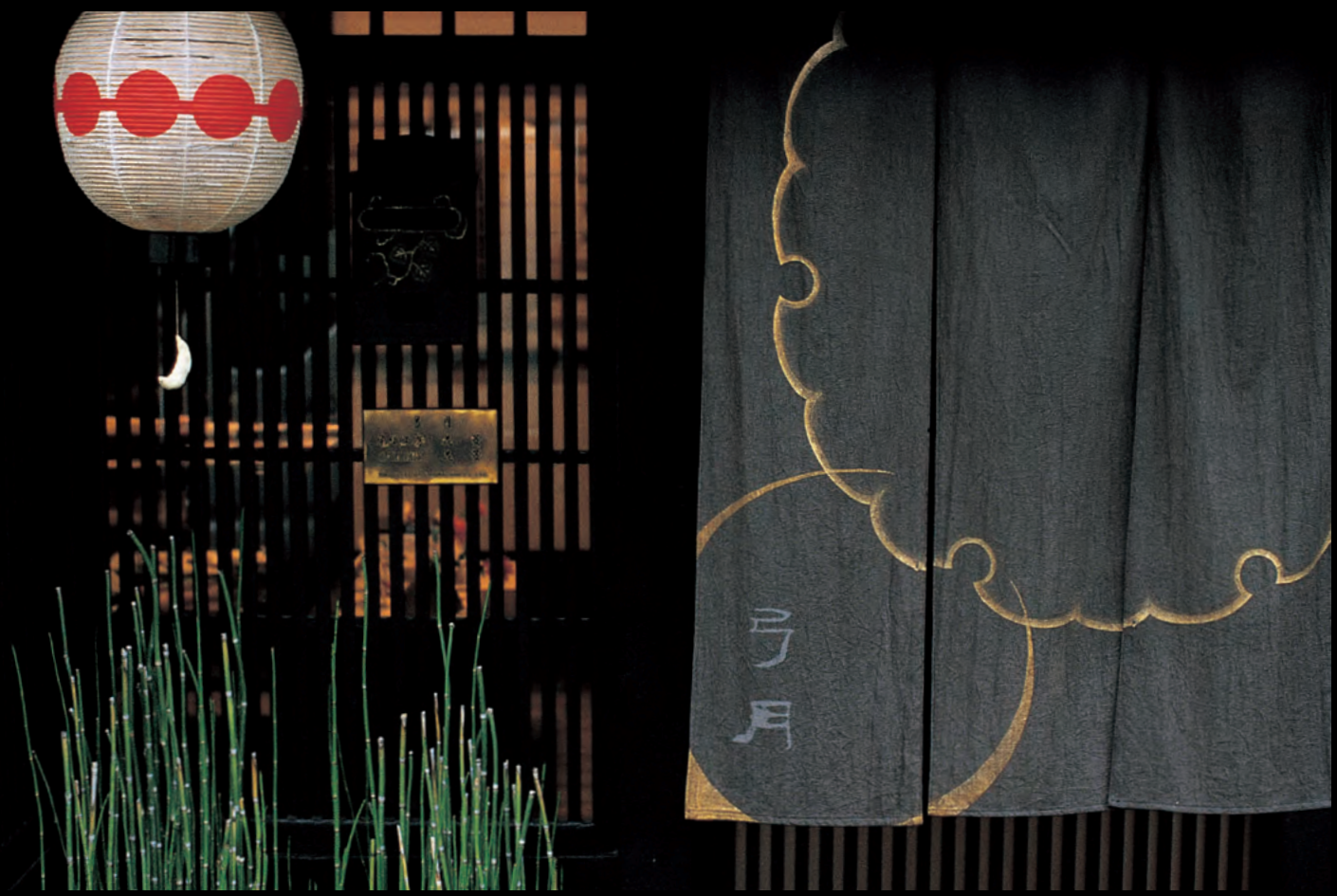
写真撮影 ● ゴラーズ・ヴィルハー
Photographs: Gorazd Vilhar

真っ黒な髪と目。真っ白に塗られた顔と首に深紅の唇のアクセント。それはきわめて様式された芸子(芸妓)の顔の色です。模様や色彩を季節に合わせた豪華な絹の衣装を着る彼女たちは、京都祇園の丸石の小道を飛び回るエキゾチックな蝶のようです。あまりにも魅力的なので、古都を訪れる人々は皆、その姿を垣間見るだけでわくわくします。「花柳界」は優美と気品の世界です。江戸で言う芸者が「芸子」、その若い実習生が「舞妓」と呼ばれる京では、彼女たちの生き方は魅惑的でロマンチックであると同時に、非常に不可思議です。お茶屋の簾の向こう、消えつつあるこの日本の伝統文化の守護者たちが、終わりゆく時代の貴重な夢を生き続けています。

**シャルロッテ・アンダーソン**

The raven black of hair and eyes, stark white of a painted face and neck, accented by crimson red lips—these are the colors of the highly stylized geiko visage. In their splendid silken finery, with patterns and hues to suit the season, these women appear like exotic butterflies flitting along the cobbled lanes of Kyoto's famed Gion quarter. So celebrated are they that nearly every visitor to that ancient city—Japanese and foreign alike—thrills to catch even a glimpse of them.
The karyukai, the so-called "flower and willow world," is an exclusive realm of beauty and grace. In Kyoto, where geisha are uniquely known as geiko and their young apprentices as maiko, their way of life seems as fascinating and romantic as it is mysterious. Behind the traditional reed sudare shades of the o-chaya teahouses, these masters and preservers of the Japanese traditional arts continue, in ever-dwindling numbers, to live out the precious dreams of a passing age.

Charlotte Anderson



Japan Now Recommendations
**BOOKS**

# 幻想の国、日本

Japan——Land of Illusions

「日本」はユーラシア大陸の東端に位置し、大陸とは海を隔てた列島であるため、古代から近代にいたるまで、他の文明圏の人々の想像力を刺激し続けてきた。また、日本からの積極的な情報発信も少なく、平安時代や江戸時代のように外交をほとんど行わなかった期間が永きにわたったこともあって、日本のイメージはつねに空想や幻想とともにあった。

日本列島についての最初のまとまった記録が、『三国志』の「魏書東夷伝倭人条」、通称「魏志倭人伝」である。この記述も、日本の中心とされている邪馬台国の描写が曖昧で、いまだにその地理的位置が特定されていないように、憶測や風聞のたぐいにもとづいて綴られていると思われる部分も多い。ちなみに同書によれば、倭人の男はすべて入れ墨をし、女は慎み深く、全般に長命で百歳、九十歳を越える例も少なくないとされている。古代中国における日本列島のイメージはまた、理想郷とされた蓬莱山と重ね合わされている。

ごく最近まで（あるいは現在も）、日本の代表的なイメージとして「フジヤマ」「ゲイシャ」「サムライ」などが挙げられていたように、日本は「お伽の国」や「幻想の国」であり続け、なかなかその実体が理解されないままにあった。それは日本の地理的条件に加え、ほかならぬ日本人が自身の国に対して明瞭なイメージやビジョンを持っていなかったことにもよる。多くの日本人にとっての「クニ」とは、故郷であり、自然風土であり、習慣習俗であり、西洋的な意味での国家を意識するようになったのは、明治維新以降のことだったのだ。

しかし一方で、日本らしさの当体は、近代国家としての成長とともに忘れられていく。かつて中国や西洋の文明が夢想し、あるいは憧れとともに遠望した日本は、実はその曖昧模糊とした「クニ」の裡にこそ、あったのである。

❖『モース・コレクション［写真編］百年前の日本』（小学館）
*"E.S. Morse Collection/Photography"* (Shogakukan)
❖『モース・コレクション［民具編］百年前の日本』（小学館）
*"E.S. Morse Collection/Arts & Crafts"* (Shogakukan)
エドワード・モース（1838-1925）は1877年にアメリカから来日し、東京大学で生物学を教えた。大森貝塚の発見者としても有名である。滞在中には日本各地を旅行し、大量のスケッチや写真を残し、さまざまな民具をコレクションした。これらはセイラム市のピーボディ博物館（現・ピーボディ・エセックス博物館）に収蔵されて、明治時代の普通の日本人の生活を知るための手がかりとなっている。

Edward Sylvester Morse (1838-1925) came to Japan from the United States in 1877 and became a lecturer in biology at the University of Tokyo. He is also famous as the discoverer of the "Shell Mounds of Omori." While in Japan, he traveled all over the country, recording his impressions in a large number of sketches and photographs, and amassing an impressive collection of folk arts and crafts. Now in the Peabody Essex Museum in Salem, Massachusetts, his collection provides fascinating insights into the life of ordinary people in the Meiji era.

Located at the easternmost end of the Eurasian landmass and separated from the continent by the sea, the islands of Japan have stimulated the imagination of other cultures since ancient times. Furthermore, since Japan made few attempts to actively spread information to the rest of the world – indeed, for long centuries both during the Heian period and during the Edo period there were practically no relations with other countries at all – the image of Japan was invariably based on fantasies and illusions.

The first real historical record of the Japanese archipelago occurs in the 3rd century Chinese "Annals of the Three Kingdoms." It describes a country called Yamatai somewhere in the middle of Japan, but the description is so vague and most likely so mixed up with speculations and hearsay that the geographical location of this country has still not been determined with certainty. The record also mentions that the men of Japan all wear tattoos while the women are modest, that everybody live long lives and that people of 90 or 100 years of age are common. Here, however, the image of Japan is probably superposed on that of the mythical Mount Penglai, the ancient Chinese earthly paradise.

Until very recently (or perhaps even today) the stereotypical image of Japan was one of "Fujiyama," "geishas" and "samurai." It remained a fairyland, while the actual Japan was still largely unknown or misunderstood. One of the reasons was of course its geographical remoteness, but it was also to a high extent due to the fact that the Japanese themselves lacked any real image or vision of their own country. To most Japanese, the word for "country" refers to their hometown, its landscape and its manners and customs. It was only after the Meiji Restoration that it came to denote the Western concept of a nation state as well.

On the other hand, as Japan rapidly developed in the modern era, much of its old Japanese-ness was lost and forgotten. Ironically, the faraway Japan that Chinese and Western cultures had been dreaming of and yearning for was precisely that obscure "country" that was disappearing.

❖マルコ･ポーロ『**東方見聞録**』(小学館)

"*The Travels of Marco Polo*" (Shogakukan)

ベネツィアの商人で旅行家としても知られるマルコ･ポーロ(1254-1324)の旅行記。故国では、『世界の記述』("La Description du Monde")あるいは『百万』("Il Milione")というタイトルが一般的。伝聞にもとづいてヨーロッパにはじめて日本(ジパング)を「黄金の国」として紹介した。これは、日本の美術工芸品に黄金が多用されていることや中尊寺の金色堂についての情報によるものとされる。この記述により、宝の国としての日本のイメージが定着する。

This "Description of the World" by the Venetian merchant and voyager Marco Polo (1254-1324) was the first book to introduce Japan to Europe. Based completely on hearsay, he mentions a country called Cipangu, a "land of gold." This is taken to refer to reports that Japanese arts and crafts frequently used gold and to rumors about the gold leaf-covered Konjikido hall of the Chusonji temple. However that may be, his description firmly established the image of Japan as a country of treasures.

❖ルイス･フロイス『**完訳フロイス日本史**』全12巻(中公文庫)

Luis Frois "*History of Japan*"
(complete translation, 12 volumes, Chuko Bunko)

ルイス･フロイス(1532-1597)はポルトガル出身のイエズス会の宣教師。中世末期の日本で布教活動を行った。『日本史』は、一部に誤解や偏見が見られるものの、フロイス自身の目で見た京都、堺、九州の様子や戦国武将たちの記録に加え、当時の日本の庶民生活をうかがい知るための記述に満ちている。日本人自身による生活風習についての当時の記録は少なく、貴重な歴史資料となっている。

Luis Frois (1532-1597) was a Jesuit missionary from Portugal, who tried to promulgate his faith in the late medieval Japan. While his "History of Japan" does exhibit a number of misunderstandings and prejudices, it also contains vivid descriptions of Kyoto, Sakai and Kyushu as seen by his own eyes, as well as accounts of the military commanders in that age of civil war, but most of all it is brimming with notes about the life of the common man. Since contemporary Japanese accounts of daily life and customs of those times are scarce, his documents are of invaluable historical importance.

❖宮本常一『**イザベラ･バードの「日本奥地紀行」を読む**』(平凡社ライブラリー)

Tsuneichi Miyamoto
"*Reading Isabella Bird's 'Unbeaten Tracks in Japan'*"
(Heibonsha Library)

イギリスの女性旅行家イザベラ･バード(1831-1904)は、明治期に関西および東北･北海道を旅行。『日本奥地紀行』は、東京から北海道までの旅行の記録で、明治維新当時の地方の風俗が詳細に記述されている。本書は、民俗学者の宮本常一が、『日本奥地紀行』をダイジェストし、解説を加えたもの。日本では子どもが大切にされていることが、とくに印象的。

The British traveler Isabella Bird (1831-1904) visited Kansai, Tohoku and Hokkaido during the Meiji period. Her book "Unbeaten Tracks in Japan" (1880) is a record of her journey from Tokyo to Hokkaido and describes in minute detail various folk customs at the time of the Meiji Restoration.This volume is a digest version of her book with additional explanations by the famous Japanese ethnologist Tsuneichi Miyamoto. The section on how good care the Japanese took of their children is particularly impressive.

❖小泉八雲『**明治日本の面影**』(講談社)

Lafcadio Hearn "*Glimpses of Unfamiliar Japan*"(Kodansha)

ギリシア出身のジャーナリスト、ラフカディオ･ハーン(1850-1904)は、1890年に来日、96年には帰化し小泉八雲と名乗る。八雲がすごした日本は、すでに近代化がすすみはじめた日本であり、失われゆく「明治日本」の気骨と美しさを愛惜の念とともに綴ったのが、本書に収められた随筆群である。八雲は日本を美化しすぎているとの批判もあるが、八雲だからこそ見ることができた日本によって、日本人が忘れかけていた大切なことを思い出すことができるのだ。

Lafcadio Hearn (1850-1904) was an Irish-American journalist born in Greece, who came to Japan in 1890. In 1896, he acquired Japanese citizenship and took the name Koizumi Yagumo. The Japan that he saw was already rapidly modernizing, and the essays in this volume were written with a reluctance to part with the spirit and beauty of "Meiji Japan" that was disappearing before his eyes. While he has sometimes been accused of over-glorifying the old Japan, it was also because Hearn was who he was that he was able to notice and write down so many important things and stories that the Japanese themselves were forgetting.

## EDITOR'S NOTE————編集後記

日本人は、自分の国について語るのが不得手である。「国」という言葉から思い浮かべるイメージも、人により場合によりさまざまだ。故郷のことであったり、自然風土であったり、生活文化であったり、ときには人や言葉、さらには政府や制度であったりする。だから、「あなたは日本が好きか？」などという問いには、質問者がどんな日本を話題にしているのかを、はっきりさせておかないと、簡単には応えることはできない。下手に応えると、無用の軋轢を生みかねない。しかも困ったことに、そのような質問をする側も、往々にしてはっきりした日本のイメージをもっていない場合が多いのだ。これでは日本人が日本をめぐって無口になるばかりである。

律令制度が敷かれ、奈良が最初の本格的な日本の首都となった。ときの為政者は、律令国家、あるいは仏教国家の建設を目指した。しかし律令制も国家仏教も、そして当の奈良＝平城京も百年持続できなかった。平安京に首都が遷ると、遣唐使までやめてしまう。公的な国際交流の途絶である。国家建設という平城京の夢は、夢のままに終わった。日本人はその当初から、「国」を相手にするのが苦手だったのではないかとさえ思えてくる。

平城京の歴史には多くの謎がある。はじまりに謎があるから日本の国が見えにくいのか、日本が見えにくいからいつまでも謎が謎のままなのか。いずれにしろ平城京の夢から1300年、日本という国に正面から向き合う、いい機会にはちがいない。

（米澤 敬）

The Japanese are not very good at talking about their own country. One of the reasons may be that the Japanese word for "country" – kuni – has such a wide range of other meanings and associations. Often it means one's hometown, or its nature or lifestyle; sometimes it refers to the people or the language, and frequently it means the government and the authorities. That is why even a seemingly simple question like "Do you like Japan?" can be very difficult to answer, unless you know which "Japan" is meant. Giving an inappropriate answer might lead to unnecessary conflicts. To make matters even worse, occasionally the person asking the question doesn't have a very clear image of Japan either. No wonder many Japanese prefer not to talk about Japan.

Heijo-kyo (ancient Nara) was Japan's first real capital based on system of centralized government. The statesmen of the time envisioned building a nation founded on law, or Buddhism. However, the centralized government system and the Buddhist nation – even the new capital itself – lasted less than a century. When the capital was moved to Kyoto, Japan stopped sending envoys to China, and official international relations ceased. The nation-building dreams of the Nara period remained just a dream. Already then, the Japanese seem to have been reluctant to deal with their "country."

The history of Heijo-kyo is full of mysteries. Perhaps it is because the beginning is so puzzling that the image of the Japanese country is still so vague – or perhaps it is the other way round: the beginning remains an enigma precisely because the image of Japan is so vague...

In any case, it is now 1300 years since the dream of Heijo-kyo. This is an excellent opportunity to look the country squarely in the face, at long last.

*Kei Yonezawa*

## If you would like to purchase this book————本誌の購入について

本誌購入ご希望の方は、以下の電話またはファクシミリにてお申し込みください。1部2000円（送料別）です。

Tel. 03-3465-5826 Fax. 03-3465-5254

If you would like to purchase a copy of this book while in Japan, please contact us on the telephone or fax number below. The price is 2000 yen per copy (plus shipping). We regret that we are currently not able to accept orders from overseas.

Tel. 03-3465-5826 Fax. 03-3465-5254

## INDEX TO ADVERTISERS————広告索引


表2：ドゥ グリソゴノ ジャパン株式会社 / de GRISOGONO
表3：ショパール ジャパン株式会社 / CHOPARD
表4：ショパール ジャパン株式会社 / CHOPARD

ザ アワーグラスジャパン株式会社 / THE HOUR GLASS
印傳屋
オーデマ ピゲ ジャパン株式会社 / AUDEMARS PIGUET
キヤノンマーケティングジャパン株式会社
小正醸造株式会社/メローコヅル・エクセレンス
コーンズ・アンド・カンパニー・リミテッド / MASERATI
株式会社ジュエリーフォンド / classical Ca,Co.
株式会社日本ビジネスプレス
ダミアーニ ジャパン株式会社 / DAMIANI
TBブティ インターナショナルジャパン株式会社 / TB BUTI
株式会社 東芝
日本空港ビルデング
株式会社ハナエモリ・アソシエイツ / HANAE MORI
フランク・ミュラージャパン / FRANCK MULLER
三井不動産株式会社 / Let's Plaza
山崎製パン株式会社
Wacha


## STAFF————スタッフ


**Publisher**
中上千里夫
Chisao Nakagami

**Producer**
丸茂光紀
Kouki Marumo

**Coordinator**
井野くに子＋堤るり
Kuniko Ino＋Ruri Tsutsumi

**Editor in Chief**
米澤敬
Kei Yonezawa

**Art Director**
宮城安総
Azusa Miyagi

**Editing & Creating**
株式会社工作舎 Kousakusha Co., Ltd.
（十川治江＋石原剛一郎＋小沼宏之＋佐藤ちひろ＋李榮恵）
(Harue Sogawa＋Goichiro Ishihara＋Hiroyuki Onuma＋Chihiro Sato＋Sakae Lee)

**Creative Cooperation**
大西成明＋佐々木光＋川本聖也＋仲川里美
Naruaki Onishi＋Hikaru Sasaki＋Seiya Kawamoto＋Satomi Nakagawa

**Translation**
ヤーン・フォルネル
Jan Fornell
株式会社アイディ ID Corporation
（崎山弘美＋A.ウォルシュ）
(Hiromi Sakiyama＋A.Walsh)

**Prepress, Printing, Bookbinding**
株式会社精興社
Seikosha Printing Co., Ltd.

**Advertising Cooperation**
株式会社キャン インターナショナル
CAN INTERNATIONAL Co., Ltd.
株式会社 アテネアーツインターナショナル
ATENE ARTS INTERNATIONAL Co., Ltd.
株式会社 日経BPアド・パートナーズ
Nikkei BP Ad. Partners, Inc.
株式会社 エル・ビー・エス
LBS Co., Ltd

**Cooperation**
日本政府観光局
Japan National Tourism Organization
社団法人 日本観光協会
Japan Tourism Association
社団法人 日本ホテル協会
Japan Hotel Association
特定非営利活動法人 JAPAN NOW 観光情報協会
JAPAN NOW Tourist Information Association (NPO)

**Executive Directors**
井口志津子＋小山敬＋佐藤徹郎＋佐藤宏子＋
中上太郎＋福山健＋丸茂光紀＋森勇二
Shizuko Iguchi＋Takashi Koyama＋Tetsuro Sato＋Hiroko Sato＋Taro Nakagami＋Takeshi Fukuyama＋Kouki Marumo＋Yuji Mori

**Publishing Company**
株式会社 ジャパン・ナウ
Japan Now Corporation

〒105-0052 東京都中央区月島1-14-7 4F
Tel. & Fax. 03-3536-1751